

教育原理13

令和4年6月27日（月）
八戸学院大学短期大学部

I.新しい時代の教育

これからの時代に求められること

人間関係を構築することで価値を作り出すことや、新しいものやアイデアを生む創造性などが求められるようになる。

→膨大な情報から何が重要かを主体的に判断し、自ら問いを立ててその解決を目指し、他者と協働しながら新たな価値を生み出していくことが求められる。

「社会の状況の変化により求められること」

家族形態の多様化、不平等や格差の増大、自然災害の脅威などの急激な変化が起きている現状がある。

→不安定・不確実で予測困難な時代を前に、「子どもたち一人一人が自らの可能性を最大限に発揮し、よりよい社会と幸福な人生を自ら創り出していく」ことが求められる。

「コンテンツ・ベースからコンピテンシー・ベースへ」

これまでの教育が目指してきた、何を学び、どれだけの知識を持つか、というところから、「**学んだことやできるようになったことをどのように活用するのか**」という意識へ移ろってきた。

→保育者には、そのことを踏まえて、保育・教育の環境を構成し、指導を行なっていくことが求められる。

1.主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）

(1)主体的・対話的で深い学びとは

「アクティブ・ラーニング」

教員による一方向的な講義とは異なり、学修者が能動的に学修することで様々な方面に広く知識などを用いることができる能力の育成を図る学修のこと。

→幼稚園教育要領や小学校以降の学習指導要領において、「主体的・対話的で深い学び」として押さえられ、学びの一つの形として取り入れられることとなった。（2018年）

1.主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）

(1)主体的・対話的で深い学びとは

「アクティブ・ラーニング」

「何を教えるか」「何を学ぶか」という知識の質や量の改善とともに、「どのように学ぶか」をいう学びの質や深まりを重視した。

→知識・技能を定着させること、学修意欲を高めることなどにつながる。

1.主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）

(1)主体的・対話的で深い学びとは

「アクティブ・ラーニング」

その具体は...

「発見学習」「問題解決学習」「体験学習」「調査学習」「教室内的グループディスカッション」「ディベート」「グループワーク」など

1.主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）

(2)教育における主体的・対話的で深い学びの実践

幼児教育においては...

「遊び」が子どもたちの学びにつながる重要なものであり、もともと子どもたちの主体性や意欲を尊重した受容的で応答的な指導や援助が行われてきた。

。

→アクティブ・ラーニングの要素を十分取り入れた教育だと言える。

1.主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）

(2)教育における主体的・対話的で深い学びの実践

より子どもたちの遊びを充実したものにし、
より多くの経験につながるようにするために、
「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」
の3つの視点を重視していくことが求められる。

「主体的な学びの視点」

周囲の環境に興味や関心を持って積極的に働きかけ、見通しをもって粘り強く取り組み、自らの遊びを振り返って、期待をもちながら次につなげる「主体的な学び」ができているか。



「対話的な学びの視点」

他者とのかかわりを深めるなかで、自分の思いや考えを表現し、伝え合ったり、考えを出し合ったり、協力したりして自らの考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。



「深い学びの視点」

直接的・具体的な体験のなかで、見方・考え方を働かせて対象とかかわって心を動かし、幼児なりのやり方やペースで試行錯誤を繰り返し、生活全体を意味あるものとして捉える「深い学び」が実現できているか。

幼児教育におけるアクティブ・ラーニングの視点

例えば... 「砂場で塩ビ管に水を流す」



どうしたら塩ビ管がうまく固定され、水が流れるのかを考える。
(深い学び)

水を流すイメージで塩ビ管を固定しようとする。
(主体的な学び)

うまくいかない時は、友達を助けたり、友達と状況を知らせ合ったりする。
(対話的な学び)

主体的・対話的で深い学びが遊びの中で十分に行われていくこと

→幼児期に育みたい「資質・能力」である、

「知識・技能の基礎」「思考力・表現力・判断力の基礎」「学びに向かう力・人間性等」が育っていく。

2. ICTと教育

(1) ICTとは

Information and Communication Technology（情報と通信の技術）の略。

ITよりもコミュニケーションを強調した表現である。

授業におけるICTの活用やICTの一例

児童・生徒の
情報活用能力の育成

児童・生徒が
ICTを活用

教員が
ICTを活用

授業におけるICTの活用

ソフトウェアの例

Webサイト
映像資料
CD-ROM
アプリケーション
ソフトウェア
など

ハードウェアの例

実物投影機
(OHP,OHC)
デジタルカメラ
ビデオカメラ
プロジェクタ
PC
タブレット
など

(2)教育におけるICTの活用

「小学校や中学校」では

- 児童がタブレット端末で作成した資料（画像やグラフなど）を、電子黒板に提示しながらスピーチをする。
- 社会科見学の見学地について、事前にインターネットで調べて班ごとにまとめ、報告の際に撮影した写真を用いて資料を作成する。

(2)教育におけるICTの活用

「幼稚園や保育所、認定こども園」では

○子どもの活用というよりは、保育者が活用

→保育ドキュメンテーション

→保護者へフォトストーリーで活動の内容を周知

→保育実務や事務に活用

など

II. 多様な教育実践

1. フレーベル主義

子どもにとっての「遊び」は、極めて深い意味を持つ重要な活動として位置付けた。

→日本では、東京女子師範学校附属幼稚園（現お茶の水女子大学附属幼稚園）において取り入れられた。

→恩物を用いた教育が展開された。

II.多様な教育実践

2.モンテッソーリ・メソッド

「自立した子ども」を育てることを目的とした教育法。

→子どもは本来、自ら成長していこうとする力を持っていて、適切な時期（敏感期）に適切な環境が与えられれば、自分で育つ、という子ども観。

→大人は、子どもの要求を汲み取り、自由を保証し、自発的な活動を援助することを重視した。

II. 多様な教育実践

3. レッジョ・エミリア・アプローチ

子どもと教師と保護者それぞれが、美的で探求的な活動を通して共に学び合い、育ち合うという市民性と創造性に満ちた教育を形成している。

→ レッジョ・エミリアというイタリアの小都市において展開されている幼児教育の形態である。

II. 多様な教育実践

4. 森のようちえん

日本においては、自然体験活動を基軸にした子育て、保育、乳児・幼少期保育の総称を「森のようちえん」と呼んでいる。

→ 森のようちえんに関わる大人は、子どもの自主性を尊重し、子どもの経験を見守ることを大切にしている。

→ おいらせ森のようちえん

II. 多様な教育実践

5. シュタイナー教育

人間の成長発達の節目が7年ごとにあると考え、0～7歳までは体を作ることを大きな課題としている。

教育そのものを芸術行為と考え、芸術に触れて完成を高め、感覚を対象に集中させることを重視している。

II. 多様な教育実践

6. フレネ教育

学校と生活を切り離さなことを重視し、子どもを起点として主体とした具体的実践を大切にしている。

子ども自身がイニシアチブを取り、協同的かつ自主的に学ぶことを重視した。

II.多様な教育実践

7.サマーヒル・スクール教育

「子どもたちを伝統的な価値観や行動様式からひとまず解放して、自分自身のものの見方を気づかせること」を教育の目的とした寄宿制の学校。

→出欠席は子どもの意思に任され、学園内の規則、授業料、教師の採用などについても、教師と子どもも平等に決める権利を持っている。

II. 多様な教育実践

8. サドベリー・スクール

自分の学びたいことを、自分のペースで、自分のやり方で学ぶ。

自分たちの力だけでは学べない内容については、教師や仲間とともにクラスを編成して学んでいく。

II. 多様な教育実践

4. フリースクール

欧米においては様々な意味合いを持つが、日本においては、主に不登校の子どもを受け入れ、学ぶ権利や居場所を保障する認可外の学校的な施設を指す。

→ フリースクール等を教育制度に位置付ける方向で議論を進めている。

参考文献

1. シリーズ知のゆりかご「いまがわかる教育原理」

第12章 教育実践の多様な取り組み

西本望編 2018年 株式会社みらい